

## 論文要旨

### I 研究の背景

産痛緩和方法の一つである、無痛分娩を選択する女性の痛みへの予測と現実や、産後の疲労感について報告されていない。

### II 研究目的

出産体験における痛みと疲労の予測と現実のギャップについて、無痛分娩者と非無痛分娩者と比較し分析する。そのギャップが出産満足度と産後の疲労感にどのように関連しているのか探索することである。

### III 研究方法

同一対象者を産前産後の 2 時点を追跡・比較する質問紙を用いた縦断的量的記述研究であり、都市部の周産期医療センター1 施設で調査した。対象は、妊娠 36 週以降の経膈分娩を予定しているローリスク妊婦 700 名にリクルートを行い、産後の質問紙は、分娩後 2 日以内に回答してもらい、有効回答の得られた 609 名を分析対象とした。妊娠期の無痛分娩の希望について、「無痛分娩」、「どちらか悩んでいる」、「非無痛分娩」の 3 群に分け、「妊婦の特性」、「過去の痛みの経験」、等の関連をみた。次に、分娩転帰を、「無痛分娩」、「非無痛分娩」の 2 群に分け、「ギャップ」、「出産満足度」、「産後の疲労感」について分析を行った。

なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認(15-018)を受けて実施した。

### IV 研究結果

1. 無痛分娩希望者は 44.5%、非無痛分娩希望者は 39.2%であり、ほとんど希望通りの分娩転帰であった。どちらか迷っている者は 16.3%で、その分娩転帰は半分に分かれた。
2. 無痛分娩希望者の平均年齢は 36.2 歳で、他の 2 群と比べ有意に高かった( $p<0.001$ )。痛みへの対処行動として、薬剤使用の抵抗感の低さが特徴としてみられ、陣痛の捉え方もネガティブな傾向がみられた。
3. 分娩転帰について無痛分娩者は、非無痛分娩者と比較し、分娩時総出血量は有意に多く、分娩所要時間(I 期・II 期)も有意に長く、器械分娩も有意に多かった( $p<0.001$ )。産後の尿閉、膀胱留置カテーテルの挿入が有意に多かった( $p<0.01$ )。
4. 陣痛のギャップは、「予測より痛かった」と回答した者が非無痛分娩者に多かったが、会陰部痛のギャップは、「予測より痛かった」と回答した者が無痛分娩者に多かった。
5. 産後の疲労感は、無痛分娩者の平均 60.1、非無痛分娩者の平均 52.2 であり、無痛分娩者は有意に得点が高かった( $p<0.001$ )。両群ともにギャップが「予測より痛かった」、「予測より疲れている」と回答した者は、産後の疲労感の得点が高かった。
6. 出産満足度は、無痛分娩者の平均 7.61、非無痛分娩者の平均 8.65 であり、非無痛分娩者の出産満足度は、無痛分娩者よりも有意に高かった( $p<0.001$ )。また、無痛分娩者では、陣痛のギャップと出産満足度との間に有意な関連が認められたが、非無痛分娩者には認められなかった。

### V 結論

無痛分娩希望者、どちらか迷っている者、非無痛分娩希望者の特徴があり、十分な情報提供や意思決定支援が必要である。痛みや産後の疲労感の予測と現実にはギャップがあり、妊娠期より伝えることは、ギャップを最小限にするためにも有用であることが示唆された。